

【第5章】

中医学の診察法 [四診]



[学習のポイント]

- ①——中医学独特の診察方法として、四診の意義と目的を理解する。
- ②——四診のそれぞれの特徴的な内容を理解する。
 - 1) 望診では、患者の神・色・形・態・舌象および分泌物・排泄物の変化と証との関連性を理解する。
 - 2) 聞診では、嗅覚と聴覚により得られる情報と証との関連性を理解する。
 - 3) 問診では、寒熱・汗・疼痛・睡眠・飲食・口味・月経・帯下などの変化と証との関連性を理解し、さらにその重要性を認識する。
 - 4) 切診では、脈診・按診の意義と一定の内容を理解する。
- ③——四診の相関性を理解することにより、診察方法の偏りによる危険性を理解する。
- ④——たえず陰陽・表裏・虚実・寒熱を意識しながら、四診が行える態度と習慣を養う。

中医の診法とは、望・聞・問・切の4つの内容から成る診察法であり、「四診」ともいわれている。

視覚により患者の全身および局所の状態を観察することを望診、聴覚と嗅覚により患者の声や分泌物などのおいの異常を知ることを聞診、患者あるいはその家族から疾病の発生や発展の経過、現在の症状およびその疾病に関連のある状況などを詳しくたずねることを問診、患者の脈を見たり、腹部や手足およびそのほかの部位を触診することを切診という。

人体は1つの有機的な総合体であり、局所の病変は全身に影響をおよぼし、内臓の病変は五官・四肢・体表などの各方面に反映する。このため舌を観察し、声を聞き、症状をたずね、脈を診るなどの手段を用いて、各方面に現れた症状や徴候を診察することによって疾病の原因、性質およびその内部との関連を知ることができる。これは弁証論治の根拠となるものである。

望・聞・問・切は、疾病の性質・状態を深く認識するための4種の方法である。各診法には固有の役割があり、臨床においては必ず四診を有機的に結びつけなければならない。すなわち「四診合参」である。中医学では、四診合参により系統的に病状を知ることができ、正確な判断を下すことができると考えている。

第1節 ● 望 診

望診とは、患者の神・色・形・態・舌象および分泌物、排泄物の色や質の病的な変化を視覚的に観察し、内臓の病変を推測し、疾病の状況を知る診察法である。中医学は、長期にわたる医療実践のなかでだいに体の外部の様子、とりわけ顔面部・舌質・舌苔と臟腑の状態には密接な関係があると認識するようになった。また、臟腑のみならず、気血・陰陽の変化も体表に反映される。したがって、望診によって、体の内部の病変を知ることができるのである。

① 全身の状況

1 望神

望神とは、患者の精神の状態、意識がはっきりしているか否か、動作に調和がとれているか、反応は鋭敏であるかどうかなどの状況を観察することである。これにより、臟腑・陰陽・気血の盛衰と疾病の予後を判断する。特に「目」は五臟六腑の精気が注ぐところであり、それは脳に通じ、肝の竅であり、心の使いである。したがって、望神に際して目の観察は重要である。望神では、次の3つの状況に注意する必要がある。

【1】得神

神は精気を基礎物質としているため、精気が充足していれば神は旺盛となる。この精気の反応は目に現れやすい。患者の目が活発に動き、輝いて生き生きとして、また精神状態がはっきりとしており、反応も鋭敏で、言語が明朗な状態を「得神」または「有神」という。この状態は正気が損傷しておらず、臟腑機能にも衰弱がみられないことを表しており、たとえ病状が重くても予後は一般的に良好であることを示している。

【2】失神

患者の眼光が暗く、瞳に生氣がない・また精神状態がおもわしくなく、反応が鈍い・呼吸が弱い・ひどい場合には意識が昏迷して、衣服や布団を手でさぐり、空をつかんで糸をさぐっているような動作をする・卒倒する・目を閉じ、口を開き、手をだらりとし、失禁するなどの状態を総称して、「失神」または「無神」という。これは正気がすでに損傷し、病状も重いことを示している。

【3】仮神

長く病気を患っている場合や、重症者で精気が極度に衰弱している場合によくみられる。例えば、以前は話したがらず、声も低く、弱々しかったものが、突然活発に話して止まらなくなる。あるいは精神が極度に衰退し意識のはっきりしなかったものが、急に頬に赤みがさす。これらは「仮神」といわれる状態である。これは陰陽が拒絶しあい、陰が陽を取斂できず、陰陽がまさに離れようとしているときにおこる現象ととらえられる。比喩的には「回光反射」(反射してもどった光がまた照り返す)、「残灯復明」(消えようとした灯がまた明るくなる)と称される仮象で危険な徴候である。

2 顔色の望診

顔色の望診では、患者の顔色と光沢を観察する。古来、医家たちは望診に際して五行学説にもとづいて色調を青・赤・黄・白・黒の5つに分類し、これにもとづく望診を「五色診」と称している。五色の変化は顔面部に最もはっきりと現れるので、ここでは顔色による五色診を説明する。

【1】顔色の診断原理とその臨床意義

経絡を通しての連絡により、臓腑の気血は顔面部に反映される。このため顔面部の色とつやを望診することにより、臓腑気血の盛衰および邪気の所在を知ることができる。

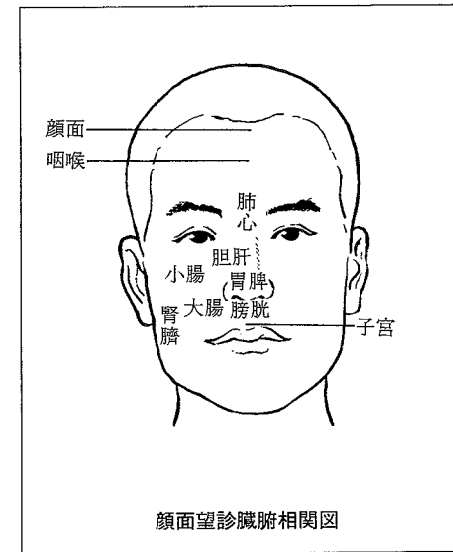
陰陽五行と臓象学説の理論にもとづき、五臓と五色の関係は、青肝・赤心・黄脾・白肺・黒腎となっている。色と艶の異常な変化は、それぞれ特徴的な病証を反映しており、艶は精気の盛衰を反映している。このため顔色と艶の有無は、疾病の程度の診断、病状の進退を判断するのに重要な意義がある。

一般的に、顔色が鮮明で艶があれば病は軽く、気血も衰えていないと判断できる。したがって、病も治癒しやすく、予後も良好である。一方、顔色が暗く、やつれている場合は、病は重く精気はすでに損傷しており、予後も楽観できないとされている。

【2】顔面部と臓腑の相関部位

顔面部の各部位は、それぞれ所定の臓腑と関係しており、これが、顔面部における望診の基礎となっている。したがって、顔面各部位を色という視点から観察することにより、的確に病状を理解することができる。

しかし、病の進行状況、色の明暗、発病メカニズムの相異によって、顔面に現れる変化もさまざまである。そのため、部位の観察を機械的に行ってはならず、四診合参により臨機応変に対応していく必要がある。そのうえで部位の望診を行うのである。部位の区分は、色診の基礎と位置づけられることを理解しておきたい。



顔面部の名称と五臓の相関的位置

- 庭……………顔面
- 眉間の上……………咽喉
- 眉間の中(印堂)……………肺
- 眉間の下(下極, 山根)……………心
- 下極の下(年寿)……………肝
- 肝部の左右……………胆
- 肝下(准頭)……………脾
- 方上(脾の両側)……………胃
- 中央(顴下)……………大腸
- 挟大腸……………腎
- 明堂(鼻の先端)以上……………小腸
- 明堂以下……………膀胱

顔面望診臓腑相関図

【3】常色と病色

1. 常色

常色とは生理的な顔面部の色つやのことを指している。顔面部が常色であれば、精神・気血・津液が充足し、臓腑の機能が正常であることを示している。精気が満ちてそれが容貌に現れるため、正常な人の顔色は明るく潤いがあり光沢がある。

2. 病色

病色とは、疾病をわずらった状態の顔面部の色つやのことを指しており、常色を除くそのほかすべての異常な色つやを指してこう呼ぶ。これには主として次の5つがある。

①青色：寒証・痛証・瘀血・驚風きょうふうに現れやすい。

寒邪により気滞血瘀となり、経脈が拘急・収引すると顔色が青くなり、ひどいときには青紫色となる。経脈が血瘀により通じなくなると痛みがおこる。また血が筋を栄養できなくなり、肝風内動となると驚風(ひきつけ)がおこる。

②赤色：熱証に現れやすい。

赤色の強いものは実熱によくみられ、微かに赤いものは虚熱によくみられる。気血は熱によりめぐりがよくなるが、熱が盛んになり血脈が充満して血がいつそう上昇すると、顔面は赤色となる。

③黄色：虚証・湿証に現れやすい。

黄色は脾虚湿蘊しつん(蘊とは、こもること)の徴候である。脾の運化作用が失調して、水湿が内に停滞し、気血を満たすことができなくなると、顔色は黄色となる。

④白色：虚証・寒証・脱血・奪氣に現れやすい。

白は気血不榮の徴候である。陽気が虚すと、気血の運行が悪くなる。あるいは気を消耗したり失血すると、気血は不足する。あるいは寒邪により血が凝滞して、